



旧制姫路高等学校コレクション 物理実験機器の遍歴 と現状

吉岡, 克己

(Citation)

姫路科学館収蔵旧制姫路高等学校コレクション物理実験機器資料:6-18

(Issue Date)

2020-11

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90007821>



旧制姫路高等学校コレクション 物理実験機器の遍歴と現状

大阪市立科学館（元姫路科学館） 吉岡 克己

はじめに

旧制姫路高等学校（以下「旧制姫高」という）は神戸大学の前身校のひとつであり、現在の文学部、国際人間科学部、理学部の源流とみなされる¹⁾。旧制姫高は第2次世界大戦下の姫路空襲（1945年6月22日、7月3日）の戦火を免れたことで、終戦時に多くの資料を残していたはずである。しかし、戦後の新制神戸大学姫路分校としての再スタート（1949年）、姫路市から神戸市への校地の移転（1964年）を経て、多くの資料が分散あるいは散逸した。その中で物理実験機器は後身の神戸大学において研究、教育に継続して使用され、老朽化、旧式化の後には一部の教官や職員の努力により多くが廃棄を免れて2019年まで神戸大学鶴甲第1キャンパス内に継承、保管されてきた。

現在、旧制姫高由来の物理実験機器資料群（以下「旧制姫高物理実験機器資料群」という）は姫路科学館に旧制姫路高等学校コレクション（以下「旧制姫高コレクション」という）として収蔵され活用されている。2019年に神戸大学から姫路市に寄贈され、1964年の神戸大学姫路分校廃止以来55年ぶりに神戸市から姫路の地に戻ったのである。その数は同定されたもので328点（2020年10月現在）を数え、旧制高等学校（以下「旧制高校」という）の同種の資料群としては旧制第四高等学校、旧制第三高等学校に次ぐものである。

本稿では、姫路科学館への収蔵にあたり筆者らが調査した旧制姫高物理実験機器資料群の数奇な運命に翻弄され現在に至る遍歴、特に姫路科学館への収蔵過程と現状を紹介し、今後の旧制姫高物理実験機器資料群活用の一助になることを目指す。

1 歴史の実験機器の価値

1-1 歴史の実験機器

17世紀にヨーロッパで興った科学革命は、仮説実証実験を繰り返す西洋的な科学発展の方法論に結実し、実験機器は科学史において大きな役割を担うことになった。実験によって得られた科学の知見は、論文や書物にまとめられ、継承された一方で、多くの実験機器は失われてしまった。これは、実験機器は道具であり、道具である限り使用目的が達成されれば廃棄されるのが運命であるからである。加えて、現代物理学の基礎が築かれた19世紀末から20世紀初頭にかけては、その進歩が急速であったため、さらに、2度の世界大戦の影響もあり、わずか100年前の実験機器でさえ、その多くが現存しない。

論文や書物によって科学的発見に至る思考の過程は辿ることができるが、その結果を

導いた当時の実験機器の精度や仕様については、書きしるされた文献のみから知ることは困難である。このため、正しく先人の業績を知るためには、実際に使用された実験機器を調査することが極めて重要である。

しかし、繰り返しになるが、使用目的を終えた道具である古い実験機器は、最先端を追求する研究者にとっては無用の長物となり、廃棄されるのが常である。それらの歴史的、科学史的価値を評価し、歴史的実験機器資料として保存し、未来に継承するためには理工系の博物館である科学館の役割は重要であり、それを使命のひとつとして積極的に取り組むべきであると考えている。

1-2 旧制高等学校の歴史的実験機器

旧制高校は、現在の学校制度が成立する 1949 年以前に帝国大学進学を前提とした教養を身に付けるために設置されたエリート養成教育の課程を担う学校である。現在の教育制度が単線型で、高等学校（全日制・定時制）生徒数の中学校生徒数に対する割合が 96%を越えている²⁾のに対し、戦前の教育制度は複線型と言われ、義務教育（尋常小学校）終了後に卒業生は多様な進路を選択した。その中で、帝国大学への登竜門である旧制高校へ進学した者は 1925 年の官立高等学校入学者数³⁾から推計すると 0.5%以下であり、女子の入学が認められなかったことを考慮しても非常に狭い門であったことがわかる。

高度な教育を実践した旧制高校で使用された実験機器は、教養として求められた幅広い分野を網羅するものであり、当時の科学教育を色濃く表す実物資料である。また、学校の設立時に一斉に多くの実験機器が備えられるため、明治から大正に設立された学校ごとの特徴から当時の科学教育の様子を伺うこともできる。

このように分野に偏りのない多様性と、時代を反映した資料構成を特徴とすることが旧制高校の歴史的実験機器資料の魅力であり研究対象としての価値である。

2 旧制姫路高等学校

2-1 旧制姫路高等学校の沿革

旧制姫高は、1923 年に、全国 25 の官立旧制高校のうち最後に設置された学校である（写真 1）。戦前においては兵庫県の最高学府として帝国大学入学の予科教育を担い、多くの卒業生を帝国大学に送りだした。

旧制高校の全国への設置拡大が進む中で、兵庫県への設置については、明石市と姫路市が誘致に熱心であった。姫路市への誘致は「高等学校設置期成同盟会」が中心的役割を果たし、地元姫路市、旧飾磨郡がそれぞれ 20 万円、4 万 8 千円を負担した他、地元関係者からの多大な寄付が集められた⁴⁾。1922 年の銀行員の初任給が約 50 円であったこと⁵⁾から、当時の 20 万円は現在の約 9 億円に相当する。このことから姫路市にとって大きな期待をもって迎えた学校であったことが窺われる。

しかし、その歴史は短く 1949 年に新制神戸大学姫路分校となり、1950 年に最後の卒業生を送り出した。表に旧制姫高の沿革を示す。

新制大学への移行にあたっては、1947 年に新制姫路大学の設立趣意書が提出されたが、単独大学としての設立が困難と判断され、1948 年には京都大学との合併が一旦決定した。しかし、GHQ の意向により「学部、分校は所県を越えて設立できない」⁶⁾こととなり、最終的に神戸大学に合併したものである。旧制姫高としては、それまで兵庫県の最高学府であったという誇りから、旧制神戸経済大学を中心に新たに設置される神戸大学への合併は本意ではなかったようである。

その後、1951 年に姫路分校を御影分校に統合させる案が出される。姫路分校を廃止することは、姫路市にとって旧制姫高以来続いてきた国立高等教育機関を失うことであり、俄かには認められないものであった。

1954 年には当時の姫路市長石見元秀が姫路市議会議員、姫路市教育委員会連名で神戸大学学長古林気楽あてに御影分校統合案の反対陳情書を提出している。この陳情書では 1923 年の旧制姫高設置時の地元協力について言及しており、姫路市にとって誇りとした学校を失うことへの悲痛な思いが窺われる⁷⁾。

しかし、1961年に作成された「神戸大学施設統合整備計画」において、神戸大学移転地である県有の「六甲ハイツ」の土地相当坪数と姫路の土地・建物を交換する方針が出され⁸⁾、1964 年に神戸大学姫路分校は廃止された。これによって、旧制姫高の足跡は姫路市から失われてしまった。現在、戦禍を免れた旧制姫高の遺構は、兵庫県立大学姫路環境人間キャンパスに残され、旧本館（現ゆりの木会館）2 階に同窓会資料室が設置され、旧講堂前には全卒業生名の記された記念碑等が建てられている（写真 2）。

こうして、旧制姫高は、その旧校地や一部の遺構が姫路市に残されているにも関わらず、その後身校は姫路市に現存しない。これは、他の旧制高校が同様に戦後の学制改革

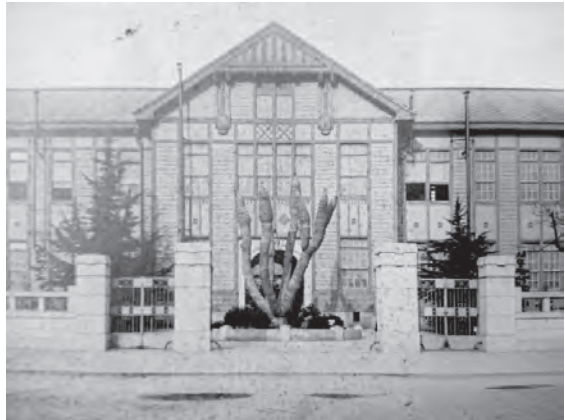


写真 1 旧制姫高本館（現ゆりの木会館）

（上）設置当初（提供：橋本正名氏）

（下）現在の様子（2020 年 10 月 6 日撮影）

の中で名称を失っても、キャンパスが後身大学の一部とされたり、場所を移転しても同じ地域に大学が継続したりして地域に歴史が残っている点に比べて特異と言わざるを得ない。旧制姫高は、国内の官立旧制高等学校で唯一、地域にその足掛かりを失い姫路市での歴史を終えたのである。



写真 2 旧制姫高講堂 (2017年11月6日撮影)

表 旧制姫高沿革

1950年 (昭25)	1949年 (昭24)	1948年 (昭23)	1947年 (昭22)	1946年 (昭21)	1945年 (昭20)	1943年 (昭18)	1926年 (大15)	1924年 (大13)
③ 第二十四回生予餞会 (最後の卒業式)	④ 神戸大学入学式 (神戸大学姫路分校へ) ↓ 1964年 (昭三十九年) 廃止	⑦ 神戸大学設置認可申請書提出 ⑥ 国立大学設置案、新制神戸大学併合を決定 ⑤ 教職員生徒代表、京大合併陳情のため上京	⑧ 「新制姫路大学創設趣意書・計画書」提出 ① 阿部知二「文学とヒューマニズム」講演	② 修業年限を三年に復活	⑧ 終戦 ⑦ 姫路大空襲 ⑥ 姫路空襲 ③ 湯川秀樹京大教授「最近の物理学」講演 ① 入学許可者、文科三十八人、理科二百三十人	⑫ 学徒出陣 ④ 修業年限を二年に短縮	⑫ 講堂竣工	⑦ 本館竣工 ③ 一回生入学許可者、文科百二十人、理科八十人

表中丸数字は月を表す (参考：同窓会資料室前略年表)

2-2 旧制姫路高等学校の資料

旧制姫高の公式な文書資料の多くは神戸大学六甲台第2キャンパス内の神戸大学大学文書史料室に保管されている。また、門標など実物資料や同窓生の寄贈による同窓会名簿、卒業アルバムなどは姫路市の兵庫県立大学姫路環境人間キャンパス内ゆりの木会館同窓会資料室に置かれている。そして、姫路市教育委員会が所管する姫路科学館に旧制姫高コレクションとして旧制姫高物理実験機器資料群が収蔵されている。これらの資料は、総合的に研究することで多様な情報を得ることができる。特に、同窓会資料室に保管されている旧制姫高で実施された試験問題の原本 (写真 3) や学生生活を示すアルバム (写真 4)、学生が使用した書き込みのある教科書などからは、旧制姫高物理実験機器資料群がどのように使用されてきたか、環境や時代背景を具体的に描き出す助けにな

る。しかし、同窓会資料室の資料は目録等が存在せず全容が不明である。今後の管理及び研究対象として、早急な調査とアーカイブ化が望まれるところである。

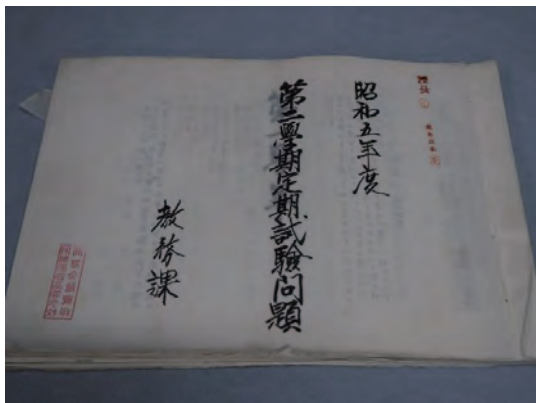


写真3 昭和5年度定期試験問題（兵庫県立大学蔵）



写真4 学生アルバム（兵庫県立大学蔵）

3 旧制姫路高等学校物理実験機器

3-1 旧制姫路高等学校物理実験器具リスト

旧制姫高物理実験機器資料群は、神戸大学大学文書史料室が所蔵する「旧制姫路高等学校物理実験器具リスト（原簿）」（以下「物品看守簿」という）

（写真5）によって全容を知ることができる。物品看守簿には、物理実験機器のほか、机、椅子、戸棚、黒板など570項目が記載されている。作成時期は定かではないが、1924年から1951年までに購入された物品が「物品看守簿 姫路分校」と印刷された用紙に年をまたいで同じ筆跡で書かれていることから、旧制姫高が神戸大学姫路分校になった1949年以降、廃止される1964年までの一定の短期間に書かれたものと考えられる。推測の域を出ないが、旧制姫高が廃止されたことをきっかけに翌年1951年に作成されたのではないかとと思われる。

いずれにしても、物品看守簿の存在が、旧制姫高物理実験機器資料群の大きな特徴である。物品看守簿には、購入年月日はもちろん購入金額が記され、多くは備考欄に納品業者も記されている。このため、後述するように姫路科学館への収蔵にあたっては、あらためて物品看守簿との照合を行い、記載内容を忠実にデータベース化した。

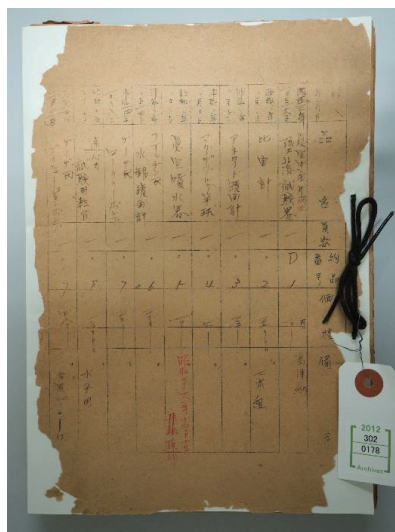


写真5 旧制姫路高等学校物理実験器具リスト（原簿）

3-2 神戸大学名誉教授橋本萬平

物品看守簿の存在が旧制姫高物理実験機器資料群の価値を高めていることについては前述したとおりである。これは、神戸大学名誉教授橋本萬平（1913-2006年）が所蔵していたものである。物品看守簿のみならず旧制姫高物理実験機器資料群の今日までの継承は、橋本萬平の尽力なくして実現しなかったことは筆者が接した誰もが認めるところであった。そこで、橋本萬平について、ここで紹介したい。



写真6 橋本萬平（提供：橋本正名氏, 1988年撮影?）

橋本萬平は、1913年2月15日に生まれ、旧制羅南中学校を第四学年修了（いわゆる飛び級）し、1929年に旧制姫高に入学した。神戸大学大学文書史料室に保管されている入学当時の調書には「温良勤勉ニシテ責任感猛ク進取ノ氣象ニ富ミ物事ニ慎重ナリ」とある。

1933年に京都帝国大学理学部物理学科に進学し、卒業後は理化学研究所嘱託、海軍機関学校教授、戦後は福知山工業専門学校講師を経て1946年に旧制姫高講師、翌年教授となった。新制に移行後、1949年に神戸大学助教授、1971年神戸大学教授となり1976年に神戸大学を退官した。

旧制姫高そして後身の神戸大学に学生として3年間、教官として29年あまり関わったことになる。それゆえ、旧制姫高には強い思いを抱いていたようである。2006年に橋本が亡くなった際の追悼文にも「神戸大学の前身である姫路高等学校の教育で使用した物理実験機器の保存に尽力された」とある⁹⁾。

3-3 神戸大学にて

旧制姫高物理実験機器資料群は、旧制姫高廃止後、神戸大学姫路分校そして、1964年の姫路分校廃止後は現在の神戸大学鶴甲第1キャンパスに場所を移し、神戸大学教養部、大学教育研究センター、大学教育推進機構へと所管を変えてきた。当初こそ本来の学生実験、研究目的に使用されたであろう実験機器も老朽化、旧式化により更新、廃棄の危機にあったことは想像に難くない。そこに、歴史的資料としての価値を主張し、散逸を防ぎ、保管に尽力したのが前述の橋本であった。橋本の退官直前に大学事務員として交流があり、2018年3月に神戸大学を退職した大壁茂子は、橋本が「(実験機器の)こびりついた埃も歴史だ」と言っていたと筆者に語ってくれた。

旧制姫高物理実験機器資料群が再認識される契機となったのは、2006年に神戸大学100年記念館展示ホールで開催された企画展示「神大科学教育の源流 -旧制姫路高等

学校の物理実験機器を中心に-」（2006年11月30日-12月13日）であった。この展示実現に向け尽力したのが、1976年の橋本退官後に管理を引き継いだ神戸大学名誉教授福田行男である。展示実現までの過程の詳細については、筆者の知り及ばないところであるが、福田を中心に10年近い歳月をもって資料の再調査、整理が実行された。その成果は、福田の他、三浦伸夫（神戸大学名誉教授）、塚原東吾（神戸大学教授）らによって「旧制姫路高等学校の物理実験機器カタログ（神戸大学 2007年）」に図録としてまとめられ発行されている。また、2007年5月にはバーチャルミュージアム「旧制姫路高等学校 物理実験機器コレクション」をwebサイトに公開した。しかし、残念ながらAdobe Flash Playerのサポート終了により、2020年現在閲覧ができなくなっている。

その後、調査、整理が完了した実験機器の多くは神戸大学鶴甲第1キャンパス内の講義棟に常設されたガラスケース内等で公開された（写真7、8）。多くの学生が自由に観覧できる環境が構築されたのである。



写真7 神戸大学講義棟での展示
(2017年9月21日撮影)



写真8 ガラスケースでの展示
(2017年9月21日撮影)

4 姫路科学館への収蔵

4-1 特別展「科学実験の今むかし」の開催

筆者の旧制姫高物理実験機器資料群との出会いは偶然であった。それは、2017年の夏、2018年の火星大接近に合わせた特別展を、旧制姫高出身で火星の観測研究の大家であった京都大学名誉教授宮本正太郎（1912-1992年）との繋がりから企画し、宮本に関する旧制姫高の資料を調査していた中でのことであった。物理実験機器は、火星とも宮本とも直接関係ない資料群であったが、その存在に圧倒され数週間のうちに2018年4月27日から5月28日まで開催した特別展「科学実験の今むかし 旧制姫路高等学校物理実験機器コレクションから」の企画を練り上げたのである（写真9）。これには、塚原、野邑理栄子（神戸大学大学文書史料室室長補佐）、大壁から多大な協力をえた。また、橋本のご子息である橋本正名氏、宮本のご息女松本由紀子氏からも旧制姫高に関する資料の提供を受けた。

借用により展示した実験機器は68点であり¹⁰⁾、展示にあたっては、福田らによる前述の「旧制姫路高等学校の物理実験機器カタログ（神戸大学2007年）」の他、新たな資料も交えて実験機器の解説を試みた（写真10）。これは、姫路市における旧制姫高物理実験機器資料群の54年ぶりの里帰りとなる公開であった。

展示は、旧制姫高の資料や、卒業生でありきっかけとなった宮本の調査結果¹¹⁾も合わせて紹介し、箱としての旧制高校、道具としての実験機器、そこで学んだ人としての科学者宮本を関連づけてデザインした¹²⁾。

また、一部の実験機器については、使用の様子を実演した。写真11は、旧制姫高実験機器資料群から「導線ノ磁石ニ捲キ付装置」を実演したものである。このほか「クインケ氏音波干渉試験器」や「島津式起電機」など資料と同じ実験機器が現在も手に入るものについては、それらも活用し、過去と現在の繋がりを実験の中で紹介した。さらに、「タイガー計算器」の体験や「実体鏡」の仕組みを使った立体鏡の工作なども行い、幅広い年齢層に体験をとおして訴えかけられるよう工夫した。

近年の科学館は、体験型の展示が主流であり、歴史的資料の静態展示は注目されることが少ない。しかし、特別展の会場で毎日実施した演示実験やギャラリートークをとおして、歴史資料も人が介在することで幼児から大人まで幅広い年齢層に興味深く受け入れられる感触をつかんだ¹³⁾。また、特別展開催によって会場に福田、三浦をはじめ旧制姫高に所縁のある一般来館者を多数迎えることができ、情報交換の舞台となったことが後の資料収蔵への足掛かりになったと考えて



写真9 特別展チラシ（表面）



写真10 特別展での実験機器展示



写真11 演示実験「見えない電気を見てみよう」

いる。

4-2 姫路市への寄贈と姫路科学館への収蔵

旧制姫高物理実験機器資料群が姫路科学館の特別展において、予想を超える関心を持って受け入れられたことを契機に、同資料群全体の神戸大学から姫路市への寄贈についての検討が進められた。神戸大学では塚原が中心となり関係部署の調整を行い、姫路市では筆者と本岡慧子（元姫路科学館）が資料全体の再調査を2018年8月に実施し、福田らが2006年までに調査作成した目録¹⁴⁾（以下「福田カタログ」という）との照合を行った。特別展実施の際は、神戸大学にて展示されていた資料から68点を選択して借用したので資料との照合は容易であったが、10年以上前に作成された福田カタログ記載の277点の一つひとつ再確認するのは予想以上に困難であった。これは、講義棟に常設されているガラスケース等には未整理の部品が雑多な状態で残されていたこと、2006年の展示会以降、保管場所を移動したものや、間違っただラベルの付けられたものが散見されたことによる。再調査の結果、新たに発見された機器を含め326点（2020年現在328点）が確認され、これを基に姫路科学館での資料番号を採番し目録を作成した。

また、資料一式は姫路科学館が収蔵し保管することになるため収蔵場所の確保が必要であった。すでに収蔵庫には余裕がなく、これにはプラネタリウム下の映写機室を整理して資料倉庫として充てることにした。映写機室は収蔵前に温度湿度環境を調査したところ、温度湿度とも予想外に適切であることが分かった。これは、映写機室は外壁に面しておらず、外光が入ることもなく、直上のプラネタリウムホールとは気密関係にないため日中はプラネタリウムホールに空調が入ることで空気が循環し一定の温度が保たれるためであると考えられる。



写真 12 資料受入時の様子 (2019年2月27日撮影)



写真 13 資料保管状態 (2019年3月30日撮影)

以上の経緯を経て、旧制姫高物理実験機器資料300点あまりは2019年2月26日に神戸大学鶴甲第1キャンパスから姫路科学館に運搬され、2月27、28日の2日間で資料倉庫に整理収蔵された（写真12）。収蔵にあたっては、各資料に新たな資料番号の荷札

を付け、物品棚にコンテナを活用して整理した（写真 13）。この際、従来のラベルも資料として保管している。これは、長年にわたり多くの関係者の努力によって継承された資料群の履歴を失わないためである。採番は原則として物品看守簿の序列により、同定不能の機器についても履歴用途不明品として 1000 番台の仮番号を与えた。また、物品看守簿や福田カタログの目録番号等が複数機器については同一番号であるのに対し、資料毎に別番号を割りあてた。さらに、検索を容易にするため分野ごとに機器を分類した。分類は第三高等学校物理実験機器コレクションの一覧表¹⁵⁾の分類に準拠した。ただし、計量、測量、製図の項目は設けず、力学（28 点）、流体力学（21 点）、音響学（31 点）、熱学（18 点）、光学（82 点）、電磁気学（116 点）、その他（30 点）の 7 項目で分類した。分類にあたっては、分野毎に記号の振られていた物品看守簿の物品番号も参考にした。また、いつ貼られたものか定かではないが、緑のビニールテープも旧制姫高実験機器資料群の目安として利用した。資料ラベルの一例を写真 14 に示す。資料には旧制姫高の会計 NO.1 等が振られた銘板が付けられ、物品看守簿の物品番号が振られた紙製のラベル、物品に直接書かれた記号が見られる。また、緑のビニールテープが貼られている。

なお、姫路科学館への収蔵にあたって、コレクション名を「旧制姫路高等学校コレクション」とした。これは、今後、神戸大学から寄贈を受けた物理実験機器資料群以外にも旧制姫高に関連する資料を姫路科学館で収集したいという考えからである。さらに、貴重な資料を研究対象として広く活用する糸口となるように、姫路科学館への収蔵に合わせて、姫路科学館ホームページで収蔵資料の概要と目録を公開している。

こうして姫路科学館に収蔵された旧制姫高物理実験機器資料群について、2019 年 3 月 15 日の第 36 回神戸大学長定例会見において神戸大学武田廣学長より姫路市への寄贈が発表された¹⁶⁾。



写真 14 資料に添付されている既存のラベル例

4-3 姫路科学館での活用

収蔵された資料は、必要に応じて調査・研究に資する形で適切に整理、保管され、後世に継承することが博物館の大きな使命である。しかし、筆者は、特に地域の歴史的資料については、積極的な公開が必要であり、それによって地域の住民の記憶に広く残すことが重要であると考えている。

一般的な収蔵資料の活用法としては、特別展での公開がある。これは、時間と経費と

労力をかけて、比較的大きな規模で実施できる点が魅力である。2006年に神戸大学で開催された「神大科学教育の源流」や2018年に姫路科学館で開催された「科学実験の今むかし」がそうである。しかし、特別展は公開期間が限られ、地域住民の記憶の定着への十分な効果は期待できない。やはり、常設展示室での継続的な活用が重要である。けれども、昨今の科学館は、体験型展示が主流でありその中で静態展示に注意を惹くことは難しい。



写真 15 ミニ展示「空気と水」

そこで、姫路科学館では、年に数回テーマを変えて、毎日開催している演示実験（サイエンスショー）のテーマに関連した旧制姫高コレクションの物理実験機器展示を、サイエンスショーの舞台近くに設置したミニ展示コーナーで公開している。この展示コーナーは、「科学実験の今むかし 旧制姫路高等学校コレクションより」として2019年6月に新設したものである。例えば、空気の力をテーマにしたサイエンスショーの公開時には、旧制姫高コレクションから流体力学、音響学の分野から11点を選び展示した（写真15）。公開時には各物理実験機器に250字程度の解説を付けている。これらの解説も旧制姫高コレクションとして保管している。

このように様々な科学現象を実験の実演の中で体験できるサイエンスショーと関連付けることで、観覧者に演示者が直接歴史の実験機器を紹介することもでき、一定の観覧者が展示に足を止めている。静態展示を体験イベントの一部に組み込んだのである。多様なテーマのサイエンスショーにあわせて物理実験機器の展示が可能なのも、旧制姫高物理実験機器資料群が幅広い分野を網羅しているからである。

その他、収蔵資料をアピールする取り組みとして、姫路科学館友の会の会員向けに隔月で発行している機関誌「あとむ」に毎回1点ずつ資料紹介の記事を掲載している。「科学の足あと」と名付けたシリーズは2020年10月現在10回を数えている。

さらに、科学的な研究として、旧制姫高コレクションの光学機器については、多久和理実（東京工業大学）ほかが本格的な調査・研究を進めており、科研費プロジェクトで購入する屈折計などによるプリズム等の物性計測を企画している。本件については、科学技術社会論学会（STS学会）第19回年次大会（2020年）でのオーガナイズドセッション「博物館資料を活用した科学史の研究および展示・演示・アーカイブ化の試み」や2021年度日本科学史学会2021年度年会でのセッションなど学会報告を計画している。

このように、旧制姫高コレクションの価値を高める学究面での取り組みは、光学機器

を中心に進められており、今後は他の分野の機器についても、調査・研究が多角的に進められることが期待される。

おわりに

2019年に神戸大学から寄贈され姫路科学館に収蔵された旧制姫高物理実験機器資料群について、その背景となる旧制姫高の歴史からコレクションの遍歴、そして姫路科学館収蔵の経緯と現状について述べてきた。やや冗長となったが、こういった経緯に関係した者が記録、公開することも無価値ではないと信じるためである。特に、本稿が全資料の写真図録と共に掲載されることは嬉しい限りである。

収蔵資料の幅広い研究活用には整理されたアーカイブの公開が必須であり、旧制姫高コレクションも目録を姫路科学館のホームページで公開している。しかし、印刷物として関係各所に保管され閲覧を可能にすることは、全体を概観する上でなお重要であると考えている。また、歴史的資料、特に地域ゆかりのものは、単に研究者に公開されるだけでなく、関係する地域の住民の記憶に残すことが、資料の継承にとって重要である¹⁷⁾。そのための活動は、まだ十分とは言えないと感じている。本稿が旧制姫高コレクションの活用において、資料を補足するものとなることを期待する。

旧制姫高コレクションに係る調査、研究並びに収蔵時の再調査、アーカイブ化及び展示公開の多くは姫路科学館の同僚であった本岡慧子氏（京都産業大学神山天文台）と共同で行ったものである。

また、一連の取組みは、筆者が2017年に本コレクションに出会って以来、限られた時間の中で進めたため、姫路科学館ほか関係各所に無理なお願いをすることになった。特に、故橋本萬平氏のご子息正名氏、元神戸大学の大壁茂子氏には貴重な資料と共に資料のみでは知ることのできない情報をいただいたことにあらためて感謝の意を表したい。

一方、神戸大学で長年にわたり継続された取組みについては、十分な資料を確認できないままの執筆となったことをお詫びしなくてはいけない。福田行男氏、三浦伸夫氏、塚原東吾氏には引き続き情報提供にご協力いただければ幸いである。

いずれにしても、内容に不正確、誤りがあれば筆者の責任であり、ご指摘いただければ今後に反映させていく所存である。

最後に、旧制姫路高等学校コレクションの今後の活用に向けて、コレクションの現状を示す機会をいただいた多久和理実氏に感謝して筆をおきたい。

【注】

- 1) 『神戸大学・大学概要 2020』(神戸大学, 2020) pp. 4-5
- 2) 『学校基本調査-令和 2 年度速報結果の概要-』(文部科学省, 2020) ,
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00003.htm (最終閲覧日: 2020 年 10 月 31 日)
- 3) 『日本帝国文部省年報. 第 53 (大正 14 年 4 月至大正 15 年 3 月) 上巻』(文部大臣官房文書課, 1929) p. 141
- 4) 神戸大学百年史編集委員会, 『神戸大学百年史通史 I』(神戸大学, 2002) pp. 608-609
- 5) 週刊朝日, 『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社, 1988) p. 51
- 6) 神戸大学百年史編集委員会, 『神戸大学百年史通史 I』(神戸大学, 2002) p. 653
- 7) 『神戸大学姫路分校の御影分校統合案の反対陳情について』(神戸大学大学文書史料室蔵, 1954)
- 8) 神戸大学百年史編集委員会, 『神戸大学百年史通史 II』(神戸大学, 2002) p. 273
- 9) 三浦伸夫, 「追悼 橋本萬平先生」, 科学史研究 Vol. 46, No. 242 (2007) p. 114
- 10) 吉岡克己、本岡慧子, 『科学実験の今むかし (展示目録)』(姫路科学館, 2018) ,
<https://www.city.himeji.lg.jp/atom/tokuten/archive/18zikken/mokuroku.pdf> (最終閲覧日: 2020 年 10 月 31 日)
- 11) 吉岡克己、本岡慧子, 「宮本正太郎と旧制姫路高等学校」, 天文月報 Vol. 111, No. 12 (2018) , pp. 864-868
- 12) 吉岡克己、本岡慧子, 「科学館における歴史資料の展示デザイン 特別展『科学実験の今むかし』から」, 第 9 回全国理工系学芸員展示研究大会集録 (2018) pp. 20-26
- 13) 本岡慧子、吉岡克己, 「地域の歴史的科学資源の発掘と特別展における公開」, 第 26 回全国科学博物館協議会研究発表大会資料 (2019) pp. 57-62
- 14) 福田行男ほか, 『旧制姫路高等学校の物理実験機器カタログ』(神戸大学, 2007)
- 15) 永平幸雄、川合葉子, 『近代日本と物理実験機器-京都大学所蔵明治・大正期物理実験機器』(京都大学学術出版会, 2001) pp. 323-338
- 16) 『学長定例記者会見』(神戸大学, 2019) ,
https://www.kobe-u.ac.jp/info/usr/press/press_20190315.html (最終閲覧日: 2020 年 10 月 31 日)
- 17) 吉岡克己、本岡慧子, 「科学館における歴史の実験機器の活用」, 物理学会誌 Vol. 75, No. 11 (2020) , pp. 706-708